

『花吹雪つづく道』 試し読み版

中村弘行著

# 花吹雪つづく道

-小田原短期大学最終講義他-



三恵社

## まえがき

本書は2017年（平成29）2月に行なった最終講義にエッセイ等を加えて編集したものである。同年3月、65歳で定年退職したが、今年の3月まで5年間特任教員として継続雇用されたため、書物にするのが今になった。

最終講義のメインは天城の寒天である。私は2005年（平成17）以降、栄養教諭の養成に携わった。2015年（平成27）、学生と共に食育教材研究を進める中で伊豆の寒天橋に興味を覚え、その由来調べから寒天遺跡の研究に没頭するようになった。天城の寒天を皮切りに、関西の寒天、薩摩の寒天、信州の寒天、岐阜の寒天と調べ、ついに樺太の寒天に行き着き、2019年（令和元）の8月には一般社団法人全国樺太連盟の支援を受けてサハリンにまで調査旅行に行った。コロナ蔓延の半年前のことである。最終講義の時点では、想像することさえできなかった。

エッセイは11本収録した。東日本大震災のあった2011年（平成23）の4月、私は食物栄養学科の学科長になった。以来、定年退職までの6年間、毎年のように小田原短大

通信や清香会だよりもに原稿を書くよう求められた。学科の年度報告のようなことを書くのが本来だとは思ったが、それでは堅苦しく誰も読んでくれないのでは？ と恐れ、そのような内容は避けた。比較的すんなり書けたこともあったが、苦しんだこともあった。それから8本に、他紙誌に掲載された文章3本を加え、計11本を「エッセイ」として収録した。

「その他」として記録、論文、研究ノート、講演、模擬授業、レシビ、インタビューを収めた。ポリウムとしてはこちらが最大だが、ご容赦願いたい。その中に新作の作品が3本ある。一つは、論文「京都西山の心太と芭蕉」である。京都は寒天発祥の地である。寒天が発明されたのには訳がある。京都では平安時代あたりから寺を中心に心太（ところてん）がさかんに食べられていたのだ。西山の心太は初等教育の教科書（往来物）に載るぐらい有名だった。江戸時代、芭蕉が西山に旅をしてそれを食べ、俳句を作ったのは偶然ではなく、寒天の歴史の必然であることを論証した。二つ目は、研究ノート「オンライン授業の落とし穴」である。教師生活最後の2年間で自宅・研究室での学生向け動画作成になるとはまったく思いもよらなかった。テレビが出現した1957年（昭和32）、社会評論家の大宅壮一は、テレビは人間の想像力や思考力を低下させると警句を発したが、オンデマン

ドストリーミング方式オンライン授業にも同種の危機感を抱いた。そのような問題意識から、独自にオンライン授業内反転学習を実践した。その記録である。三つ目は、インタビュー「学生歌『二歳の』はこうして誕生した」である。私が専任教員になった時、小田原短期大学には校歌がなく、学生歌が校歌の役割を果たしていた。作詞・作曲は当時の学生と教師。無償で作られた真心の歌である。心に響く素晴らしい歌詞とメロデーは皆に愛された。創立30周年の1987年(昭和62)に校歌が作られたが、学生歌は依然として歌い継がれている。今回、作曲者の荻野節子先生(名誉教授)に手紙と電話で何度も話をうかがい、知り得たことをインタビュー形式に再構成した。私にとって幸運だったのは、卒寿(90歳)を過ぎた先生が元氣にお過ごしになっていることだった。時は過ぎゆく。いつか誰かが書かねば寒天遺跡のように歴史に埋もれてしまう、と柄にもなく使命感にかられた。何かの参考になれば幸せである。本書のタイトル「花吹雪つづく道」は、学生歌「二歳の」の一番の歌詞の一節である。

2022年6月

中村弘行

## 【目次】

まえがき・・・3

### Ⅰ 最終講義・・・9

回顧 大学生活47年・・・12

小田原短期大学での33年間 思い出ベスト10・・・16

天城の寒天・・・43

### Ⅱ エッセイ・・・55

震災に負けず学んでいます・・・56

友達教育論・・・59

初めての試み・・・61

納豆…… 63

食物栄養学科の魅力…… 65

カシワ飯と伊勢たくわん…… 67

謎かけと共に…… 74

恵那市の寒天列車…… 76

前田先生の研究室…… 83

樺太寒天の真実…… 86

メタセコイア…… 92

### 三 その他…… 95

#### 〈記録〉

天城からサハリンへ…… 96

#### 〈論文〉

京都西山の心太と芭蕉…… 104

〈研究ノート〉

食育の元祖 村井弦斎……113

オンライン授業の落とし穴……119

〈講演〉

小田原と北原白秋……155

〈模擬授業〉

きんぴらはなぜきんぴら?……167

〈レシピ〉

ヘルシー簡単寒天料理……176

〈インタビュー〉

学生歌「二歳の」はこうして誕生した……182

Ⅲ

転載した作品の初出紙誌一覧……195

あとがき……197

一

# 最終講義





同僚による筆者の紹介



講義をする筆者 2017 年

## 最終講義

2017年（平成29）2月24日

207・8教室

今日は教職員、在学生、卒業生、地域の皆様、私の最終講義に多数出席してくださりありがとうございます。東京教育大学、筑波大学出身の皆様には、お忙しいところ、遠方より足をお運びいただき恐縮しています。

今日の話は三部構成になっています。

一部 回顧 大学生活47年

二部 小田原短期大学での33年間 思い出ベスト10

三部 天城の寒天

一部・二部はスライドで102枚、三部は108枚にまとめました。約90分で終了する予定です。では、さっそく始めたいと思います。

## 一部 回顧 大学生活47年

私の大学生活は1970年（昭和45）、東京教育大学教育学部に入學したことから始まりました。三重県立伊勢高校で學んだ私は、後で触れますように紆余曲折の末、東京教育大学を選び受験しました。前年が東京大学と共に入試中止だったためか、大変な競争率でした。運良く合格して大学院修士課程まで学びました。移転があったため大学院博士課程は筑波大学です。その後、1983年（昭和58）に本學の非常勤講師になり、翌年専任講師になりました。今日まで通算47年間、學生、院生、教員として大學で過ごしてきました。

47年の間に私の身の回りにどんな変化があったのかをお話します。

まず、授業料です。私が入學した頃の国立大學の授業料は月3000円、年額にして36000円でした。私が大學と大学院で支払った授業料の総額は約100万円です。私は大学院博士課程で3年間、日本育英会の奨学金をもらいました。その総額は約200万円です。当時の奨学金には「教育職・研究職に就職した場合の特別免除制度」というのがあり、本學での勤務実績15年を積んだ時点で日本育英会から返還を免除されました。支払った学

費は100万円、もらった奨学金は200万円ということになります。つまり私は、大学と大学院で学ばせてもらった上に100万円をもらったのです。

現在の国立大学授業料は年間53万円です。約15倍になりました。日本育英会は日本学生支援機構に改組され、奨学金は利子付貸与となり、特別免除制度は廃止されました。学生は多額の授業料を払い、利子付奨学金を借り、長時間のアルバイトを抱えているというのが現状です。なぜこうなったのかというと、日本は教育にあまりお金を出さない国だからです。現在の日本の教育予算額は先進国(OECD)中最下位です。

次に、学生および教員の姿を比較してみたいと思います。私が入学したころの大学・短大進学率は27%でした。教員の主たる関心は研究で、授業は二の次でした。出席をとらない授業なんてのはザラにあり、授業回数は今よりずっと少なかったと思います。教室に冷房がない時代ですから、教員が夏休み前、暑さを理由に授業を休講にするというようなこともよくありました。

一方、学生の関心は、教養・読書・自己形成が主で、授業・資格・就職は従でした。今日、キャリア教育は大学教育の主要な柱の一つになっていますが、その始まりは1990

年代のバブル崩壊期です。それ以前の大学はもっぱら学問探究の場であり、就職斡旋は下宿・アルバイト紹介、奨学金と共に学生厚生補導の一項目に過ぎず、教育課程外でした。現在の大学・短大進学率は57%で、約2倍になりました。教員の主たる仕事は教育です。出席管理、シラバス、成績評価、学生による授業評価とフィードバック、FD活動、個別指導などに追われています。学生の主たる関心は教養・読書・自己形成ではなく、授業・資格・就職に切り替わりました。そのため、どの大学もキャリア教育を大々的に打ち出しています。

こうした変化の背景には何があったのか、思いつく限りのことをあげてみたいと思います。一つは、中流社会の崩壊、貧富の差の拡大です。いわゆるフツーがなくなったのです。二つ目は、大学の大衆化、全人化です。大学卒は当たり前で就職の際の切り札ではなくなりました。三つ目は、デジタル化です。手紙はメールに、電話はスマホに、テレビはブラウザ管から地デジに、黒板はパワポに変わりました。四つ目はイノベーション偏重の理系重視、産学協同の流れです。

最後に、今の社会はどうなっているのかも素描しておきたいと思います。一つは分断が

進んでいます。障害者の排除やヘイトスピーチの増加は、人間として共に生きる感覚が薄れていることの証拠だと思えます。二つ目は思考の短絡化、つまりじっくりゆっくり考える習慣の喪失です。文系軽視、基礎学問軽視、産業直結化傾向は、人々から無駄を覚悟で時間をかけてゆっくり深く考える機会を奪っていると思います。

良い点もあげておきたいと思えます。一つは、健康寿命が世界トップクラスであることです。手前みそになりますが、その背景に食による健康づくり、つまり食育の普及があると思います。二つ目は、男女平等の普及です。昨年度すなわち2016年度(平成28)の女子の大学・短大進学率は、57.1%と男子の55.6%を上回っています。女子の57.1%のうち8.9%が短大への進学です。短大の存在感を感じます。三つ目は、情報の共有化が進んだことです。私が本学に勤め始めた1980年代の学内での情報の扱いはひどいものでした。大事な情報は一部の幹部教職員が握っていて、それが原因で問題の発見・解決が遅れたり、不要な争いを生んだりというようなことがよくありました。今はパソコンによって情報共有率は高まり、そのようなことは少なくなりました。四つ目は危機管理意識が高まったことです。2011年(平成23)の東日本大震災以降、地震対策はきわめて具体的にな

りました。私はその年の4月に食物栄養学科の学科長に就任したのですが、最初の大仕事  
が神奈川県栄養士養成施設協議会主催「これから栄養士になる人の集い」の開催でした。  
会場は小田原市民会館で、参加者数は約600名でした。老朽化した市民会館に何度も足を  
運んで避難経路の確認をすると共に、参加者向けの「災害時対策マニュアル」の作成に打  
ち込んだことを思い出します。

## 二部 小田原短期大学での33年間 思い出ベスト10

### 第10位 「文章構成法」担当

1984年（昭和59）に専任講師になりました。受け持った授業科目は「教育原理」、  
「道徳教育の研究」、「教育実習」などの教職科目でした。当時の教授会は専任講師も出席  
できたので、私はある時、その席上で学生の小論文指導をしたいと申し出ました。わりに  
すんなりと認められ、とても嬉しかったのを覚えています。今にして思えば、新人教員の  
お手並み拝見というところだったと思います。

2001年（平成13）に『カフェ気分で小論文』（三恵社）というテキストを作りました。

た。表紙デザインは、当時多摩美術大学でグラフィックデザインを専攻していた娘に頼みました。

小論文といってもその意味は曖昧で、入社試験の出題例を眺めると、「学生生活で打ち込んだこと」「私の食生活」「情熱を持って取り組んだもの」など作文と言ってもいいようなものも見受けられます。そこで私は小論文を「作文型小論文」と「論文型小論文」とに分け、主に「論文型小論文」の指導をしました。

論文型小論文とは次のような題の小論文です。

「座右の銘」

「私の尊敬する人」

「今の若者が忘れていているもの」

「食べ物と健康」

「働くことの意味」

「学ぶとは」

「私の労働観」



最初の「文章構成法」テキスト



「地球温暖化について」

「公共のマナーについて」

「グローバル化の長所と欠点」

「食品ロスを減らすには」

これらの問題を攻略する方法はただ一つ。まず結論を書き、次いで理由を書くというスタイルを貫くことです。最初は中身がなくても、その形を貫くことで思考が変容し、徐々に自身もついてきます。「思考が変容する」とは、何事に対しても自分なりの考えを持ち、なぜ自分はそう考えるのかを人に説明できるようになるということです。そのように書く面白さをマスターした学生は、書くことが好きになっていくのが分かりました。論理的思考人間になっていくわけです。

## 第9位 表彰状

これは、スポーツの話です。専任講師になった年、私はバレーボール部の顧問・監督になりました。当時、体育担当の先生が神奈川県大学バレーボール連盟の役員をしていて、